

幼児と生涯スポーツに関する一考察

木 下 茂 昭

A Study of Child and Life Time Sport

Shigeaki KINOSHITA

1. 緒 言

1990年代以降子ども達を取り巻く社会的環境は大きく変化してきている。その結果、青少年犯罪の増加、いじめや不登校に関する問題、受験競争の過熱化、学校外での社会体験の不足などという問題は教育現場の中だけではなく、社会的な問題として大きく取り上げられてきている。本来学習することはもとより、豊かな人間性が育まれるべき時期における上述したような教育に関する問題は、多様化し、複雑なものとなってきている。また、現在の我が国においては国際化・情報化・科学技術の一層の発展・環境問題・高齢化・少子化など様々な側面が大きく変化してきている。このように社会状況が変化する中で、旧文部省は平成10年12月14日に学校教育法施行規則の一部改正と幼稚園教育要領、小学校学習指導要領、および中学校学習指導要領の改訂を行い、平成14年4月1日から完全学校週5日制のもとで、それらを実施してきている。¹⁶⁾ この改訂は、「ゆとり」の中で「特色ある教育」を展開し、幼児・児童・生徒に「生きる力」を育んでいくことを教育の基本的なねらいとし、社会的に問題になっている子供たちに関わる諸問題を解決することを目的としている。そのため、改訂の基本方針は

- 1) 豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること。
- 2) 自ら学び、自ら考える力を育成すること。
- 3) ゆとりのある教育活動を展開する中で、基礎・基本の確実な定着を図り、個性を生かす教育を充実すること。

- 4) 各学校が創意工夫を生かし特色ある教育、特色ある学校づくりを進めること。

という4点である。¹⁶⁾

今回の学習指導要領の改訂により、小中学校の学習内容は3割削減となった。そのため、子ども達の学力の低下問題が取り上げられるようになってきている。また、完全学校週5日制によりできた休日は、本来考えられていた用いられ方ではなく、学力低下に対する不安感から、学習塾や進学塾に子ども達を通わせる傾向が増加してきている。そのため、平成14年度の塾産業は約9700億円の産業へと成長している。

今回の学習指導要領の改訂は子ども達のゆとりのない生活、社会性の不足や倫理観の問題、自立の遅れ、健康・体力問題などという子ども達に関わる諸問題を解消していくことがその趣旨となっていたといえる。その方法として、「ゆとり」の中で「生きる力」を育んでいこうとしたのである。塾などに通う子ども達の増加は子ども達のゆとりを奪うことにもなりうるし、地域社会との連携も奪ってしまうこととなる。また、生きる力を根底から支ええると考えられる体力の育成は不可能になってしまうということができよう。

社会状況の変化は子ども達の遊びに変化・変質をもたらしたことはいうまでもない。すなわち、子供たちの遊戯の形態や意味づけが大きく変化してきていること、また、子供の世界から群れ型の遊びが失われ、ギャング集団も解体してしまっている。あるいは、子ども達の身の回りにもIT化が進み、コン

ピュータや携帯電話などが普及し、いわゆる一人遊びが多くなってきている。^{9), 17)}

以上述べてきたような状況を考えると、将来の社会を担っていくであろう子ども達の健康増進や体力の育成は十分とはいえないことになろう。そこで、本研究では、子ども達の生きる力を支える体力を育成するために、生涯スポーツという観点から、子ども達の遊びとスポーツについて考察することを目的とした。

2. 本研究の目的と方法

本研究では、生きる力を育んでいくための根底を支える健康の増進と体力の育成について、生涯スポーツという観点から、子どもにとっての遊びとスポーツについて考察することを目的とした、いわゆる文献研究である。

3. 本 論

1996年(平成8年)7月に中央教育審議会から出された「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」という答申の中に「生きる力」と「ゆとり」という二語が示されている。そして、この二語こそが21世紀の教育を展開していくための中核をなしていくものとしている。

生きる力とは、①実践力(変化の激しい社会のいかなる場面でも他人と協調しつつ自立的に社会生活を送っていくために必要となる実践的な力)、②問題解決能力(単に過去の知識を記憶しているということではなく、初めて遭遇するような場面でも、自分で課題を見つけ、自ら考え、自ら問題を解決していく資質や能力)、③精神力(理性的な判断力や合理的な精神だけでなく、美しいものや自然に感動する心といった柔らかな感性)という3点で捉えることができる。¹⁶⁾そして、それらを支えるものとして、健康・体力は必要不可欠なものである。また、生きる力を育てるのは、学校という教育機関だけではなく、家庭や地域社会においても行われなくてはならないことである。そうすることによって、現在社会問題として取り上げられている不登校や暴力行為などという子ども達の問題行動も解消していくことになる。

しかし、子ども達の生きる力を支える体力の低下は社会的な問題として取りあげられるようになって

きている。そこで、まず現在の子供達(子ども達)の遊びについて考察していくこととする。

3.1. 子どもの遊びとスポーツ

高度経済成長は子供たちの生活にも大きな影響を与えてきた。たとえば、子供たちが遊ぶ姿があまり見られなくなったことや、夜遅くに学習塾などから家路を急ぐ姿が多くみられるようになってきたことなどが挙げられる。このような子ども達の就寝時間は遅くなり、また、就寝してからもなかなか眠つけない子どもなどの睡眠障害、体温の低下、朝から元氣よく活動できないなど、子ども達の健康にさまざまな弊害をもたらしている。^{1), 17)}

また、子供たちの生活が個別化してきているため、群れ型の遊びがみられなくなっていることや、家の中で一人遊びをする子供が増加してきていることなどもみられる。これらは、遊び場の減少、遊ぶ時間の減少、遊びの多様化や生活様式の変化などによって、子供たちにもたらされたことといえる。そして、科学技術のさらなる進歩、特に、高度情報化社会となった今日、子供たちの身の回りにはコンピュータなどの機器が氾濫したために、この傾向はさらに強まったと考えられる。⁹⁾

平成14年度に改訂された学習指導要領の内容は基礎・基本に重点が置かれ、その指導内容が3割削減された。¹⁶⁾そのため、学力の低下が問題として取り上げられ、新聞などで報道されることがある。このような報道から、子ども達の親は学校完全週5日制が導入され、新しくできた土曜休日に子ども達を塾に通わせるなどして、子ども達の学力を確保しようとする傾向が生まれてきている。このような過ごし方は学校5日制を導入した本来の目的とは異なるものである。そればかりか平日においても塾などに通う子ども達は増加傾向を示している。¹⁷⁾

このような生活をしている子ども達は精神的にも、肉体的にも疲れきっているといわれている。そのため、現代の子ども達の休日の過ごし方は「テレビゲームやカードゲームを室内でする」、「テレビを見る」などといった全身を使わないでできる遊びが多くみられ、¹⁷⁾いいかえれば、日常生活で蓄積した疲労をとるために用いているといっても過言ではない。

このような現象は幼児にも見られることである。たとえば、高度経済成長から続いている高学歴社会

は、幼児にもその影響与えている。それは、子ども達を高学歴社会に対応させるべく、幼児期から知育を育てることに力を入れるということを第一に考えるようになってきたことである。そのため、幼児教育を担う幼稚園においても、知育教育に力を入れ、系統的教育を実施しているところさえ見られる。さらに、子ども達を有名小学校に入学させるために、塾やおけいごとなどに通わせるために、子ども達が遊びたいという欲求があるにもかかわらずそれがかなわないことさえみられる。

また、子ども達が通っているおけいごとなどの中にはスイミングクラブや各種のスポーツクラブなどが含まれている。¹⁷⁾ このことは、保護者が子ども達の学力だけではなく、健康についても考えているために通わせているということができよう。どのようなスポーツクラブに通うかについて決定する時には、子ども達の意志によって決定することになるであろう。それは時には子ども達が憧れるスポーツ選手と同様な種目を選択することもあるであろうし、親の判断で決定することもあるであろう。しかし、スポーツクラブは多くの場合、そのスポーツに必要な技能や技術の習得が最大の目標になる。幼児期の子どもにある特定の種目のみを行わせることは運動能力の偏りにつながっていくことになるであろう。また、練習に打ち込ませることによって、競争志向や専門化へと、当初の目的とは異なった方向へと進んでいくことも考えられる。その結果として、身体の一部を繰り返し使用することによって起こる過使用症候群やスポーツ障害にもつながっていくことが予想される。これでは子ども達のためにはと思って通わせた結果が親の意図とは反対の結果をもたらすことにさえなるであろう。一つの種目でスペシャリストを目指すとしても、それは極一部の人間のことであり、多くの子ども達には楽しみとしてのスポーツを経験させていくことが、将来にわたってもスポーツを生活に取り入れていくことにつながっていくことになるであろう。

本来スポーツは人々が楽しみ、よりよく生きていくために、自発的に行う自由な身体活動ということができよう。また、スポーツをする中で精神的な成長や健康な身体が育成されていくものといえる。そのスポーツには以下のような機能があると考えられる。それらは、

- 1) 健全な発育・発達を促進すること。
- 2) 多様な運動技能を獲得すること。
- 3) 健康や体力の保持増進に役立つこと。
- 4) 心の成長に役立つこと。

などである。²²⁾

幼児期の発育・発達にはめざましいものがある。人は生まれてから死に至るまで、さまざまな身体運動と関わり、発育していくものである。特に、幼児期には運動をすることで、身体の各器官、組織の成長に有効な刺激となりうるものである。そのためには、一つの運動ということではなく、さまざまな運動を経験させることが必要となる。また、走る・跳ぶ・投げる・蹴る・打つ・泳ぐなどの基本的な運動は幼児期にある子ども達に経験させることによって、身に付くものであり、成長後に行う各種のスポーツの基礎となるものでもある。そして、それにとまって、健康が保たれ、体力の保持・増進が可能となる。さらに、集団でスポーツをすることにより、忍耐力や向上心、仲間との連帯感、責任感や協調性などのいわゆる社会性までも身につけることが可能となる。

このようなことは、スポーツ以外の身体活動でも獲得することは可能である。それは全身を活用する遊びを親子や集団で十分に行うことである。追いかけっこ、鬼ごっこ、ボール投げなどを幼児期に十分行うことでも、スポーツに必要な運動能力を身につけ、健康の保持・増進をはかることができる。また、追いかけっこ、鬼ごっこなどにはスポーツほどは制度化されていないしろルールがあるために、社会性をも身に付けていくことになる。言い換えるならば、幼児にとっての遊びはスポーツであり、スポーツは遊びであるということができよう。⁵⁾ 遊びとスポーツの関係をこのように捉え、子ども達の生活の中に発達段階に即した遊びを取り入れていく必要がある。そうすることによって、子ども達が学習活動や社会的な活動に積極的に取り組むことができるようになるであろうし、豊かな人生を送っていくことになるであろう。

3.2. 子どもの体力の現状

子ども達の体力の現状を知るためには、文部省が、昭和39年(1964年)から、国民の体力・運動能力の現状を明らかにし、体育指導と行政上の基礎資料を

得ることを目的として、毎年実施してきている「体力・運動能力調査」の結果を参考にすることがよいといえよう。それによると、子ども達の体力は調査開始以降、昭和50年頃にかけては向上傾向がみられたが、昭和50年頃から昭和60年頃までは停滞傾向、その後現在まで、15年以上にわたって低下傾向を示している。²²⁾このような状況は、社会環境や生活様式の変化などにより生じたことと考えられ、子ども達には全身を用いた遊びの減少、生活習慣の乱れがもたらされたために起こったことといえよう。また、公立学校等の週休2日制が平成14年より、実施されてきているが、その結果、増加した休日は本来考えられていた目的とはかなり異なった過ごし方をしている。

このような状況を受けて、平成11年9月22日に文部大臣は「スポーツ振興基本計画の在り方について」という諮問を旧文部省に設置されていた保健体育審議会に行った。保健体育審議会では、この諮問以前に、「21世紀に向けたスポーツの振興方策について（平成元年11月21日）」、また、「生涯にわたる心身の健康の増進のための今後の健康に関する教育およびスポーツの振興の在り方について（平成9年9月22日）」という答申を行っている。これらの答申のもとに、国や地方公共団体において、スポーツ振興に取り組んでいたところに、青少年の体力の低下・運動能力の低下傾向、身近なスポーツ環境の整備充実の必要性などという理由から「スポーツ振興基本計画の在り方について」諮問が出されたために、

- 1) 生涯スポーツの実現に向けた地域におけるスポーツ環境の整備充実
- 2) 我が国の国際競技力の総合的な向上方策
- 3) 上記の視点に関連し、生涯スポーツ・競技スポーツと学校体育との連携を推進するための方策

という3点について検討がなされた。²²⁾そして、この答申をもとにさまざまな施策が推進されて、現在に至っている。しかし、青少年の体力は現在も低下傾向を示しているのが実情である。また、運動不足に起因する肥満傾向、それに伴う高血圧や高脂血症などいわゆる生活習慣病を発症する可能性もあることから、健康をも脅かしているといってもよいであろう。

このような状況から、子どもの体力低下について

は2002年（平成14年）9月に、中央教育審議会も文部科学大臣から「子どもの体力向上のための総合的方策について」という諮問に、答申を出すなど、子ども達の体力低下に歯止めをかけようとしている。それによれば、スポーツ・外遊び・自然体験活動など、子どもがより一層体を動かし、運動に親しむようにすること、また、子どもの体力向上のための望ましい生活習慣を確立するための方策を構築すること、という2つの視点からこの問題の解決を試みようとしている。そこには、体力が人間の発達・発育・成長を支え、創造的活動をするための源であり、知性を磨き、知力を働かせる源であるという考え方が根底にあるものといえる。

また、子どもの体力の低下傾向をこのまま放置しておくことは、大きな社会問題になっていくであろうし、子ども達の健康問題にまで発展していくことにもなるであろう。それは子ども達の体力を向上させ、健康を保持・増進させておかなくは将来の我が国をに担っていくことができなくなってしまうことが予想されるためである。

3.3. 生涯スポーツ

保健体育審議会が行った「スポーツ振興基本計画の在り方について」という答申には、スポーツの意義について、以下のように述べられている。すなわち、

「スポーツは人生をより豊かにし、充実すると共に、人間の身体的・精神的な欲求に答える世界共通の人類の文化の一つである。心身の両面に影響を与える文化としてのスポーツは、明るく豊かで活力に満ちた社会の形成や個々人の心身の健全な発達に必要な不可欠なものであり、人々が生涯にわたってスポーツに親しむことは、極めて大きな意義を有している」

と指摘している。²²⁾

スポーツをすることは本来人間が持ち合わせている身体を動かすという欲求を充足することに役立つのはもちろんのことである。また、スポーツをすることによって得られる爽快感や達成感などの精神的な充足、さらに、体力の向上や生活習慣病の予防など心身の健康の保持増進に有効に作用することはいうまでもない。今後、高齢化社会が一層進むことを

考えると Q.O.L. という観点からもスポーツ活動を実践することは意義のあることになるといえよう。

また、上記の答申で、スポーツの社会的意義について、

- 1) 青少年の健全育成に資する。
- 2) 地域の連帯感の醸成に資する。
- 3) 国民経済に寄与する。
- 4) 国際的な友好と親善に資する。

という4点をあげている。そして、このような立場から、生涯スポーツ社会の早期実現の必要性を述べている。²²⁾

生涯スポーツという概念は、1965年にパリで開催されたユネスコ成人教育国際委員会において、提唱された生涯教育という概念の基に構築されたものである。我が国においては、その当初、児童・生徒の教育に関する論議がなされたが、1970年代後半から、成人教育に対する論議が盛んに行われるようになった。このような論議は、急激な技術革新と産業構造の変化、生活構造の変化、および、余暇時間の増大などの理由によるものである。そして、国民が労働の他の生きがいとして、職業能力の向上のため、家庭生活を充実させるため、老後の生活の充実のためには生涯にわたって、スポーツ・教養・趣味に関することを学習して、充実した人生を送るようにしていかうとする生涯学習という概念が広がりを見せることになった。

このようにして、我が国に生涯教育という概念が広まりをみせると、体育界においては、「生涯体育」、あるいは「生涯スポーツ」というかたちで広まりをみせていったが、1980年代後半からは「生涯スポーツ」という用語で定着した。生涯学習は①生涯にわたる行動の変容または改善、②生涯にわたる習慣の再形成、③生涯にわたり人間の特性である学習能力を発揮して人間であり続けること、という3点に要約できる。これらのことから、生涯スポーツは、①生涯にわたって何らかのスポーツを実践し、自己の行動を変容させていくこと、②生涯にわたってスポーツを実践し、運動の人体に対する影響を考え、自己の習慣の再形成をすること、③生涯にわたりスポーツを実践することで、自己の学習能力高めていくこと、と捉えることができる。

スポーツには、①技能の習得、②精神の鍛錬、③友人の獲得、④ストレスの解消、⑤運動不足の解消、

⑥健康の保持・増進などという付加価値がある。これらの付加価値こそ、上述したような生涯スポーツの概念に符合する価値ということができよう。すなわち、生涯スポーツは、健康のため、楽しみの追求のため、人生を充実させるため、多くの人とふれ合うため、などということがその目的となる。したがって、生涯スポーツは、実施者一人ひとりが自分の体力状況や好み、あるいは目的により種目を選択し、生活の状況にスポーツ活動をあわせ、生活の充実、向上に役立てるように工夫することが大切となる。

現在生涯学習の一環としてスポーツに取り組んでいる人々の参加理由は健康の保持・増進、ストレスの解消や友人の獲得などさまざまな動機がみられる。そして、その誰もが身体活動が好きであり、子どもの頃から運動が好きであったということができよう。いいかえれば、幼児期に全身を用いた身体活動、遊びを十分に行ってきた人々であるといえよう。

現在体力が低下しているといわれている子ども達は身体活動や遊びを十分には行っていない状況にある。また、そのようなことをする習慣さえ身に付いていないといえる。

3.4. 子どもと生涯スポーツ

本来幼児期には、さまざまな遊びや運動に親しみ、遊びや運動の楽しさを味わう必要がある。そうすることによって、健康な心と体が育成されていくものである。

まず、子ども達の遊びについて考えてみるとその価値や有効性については、古くから論じられてきている。同様に、現代においても多くの著名な研究者がその価値を認め、論じている。それらは、さまざまな考え方に立脚して述べられているが、遊びの価値についてまとめてみると、①社会性の発達、②身体性の発達、③性格形成、④創造性の育成、という4点になろう。これらの価値と同様な価値はスポーツにも認められるものである。

幼児期の子ども達の発育・発達とは短期間にもかかわらず、目を見張るものがある。それらは、形態的発育、機能的発育、知能・心・社会性などさまざまな発達である。¹³⁾ これらは、それぞれが単独に発育・発達するのではなく、複雑に絡み合いながら、発育・発達するものである。また、自然的環境や人為的環境なども複雑に絡み合っよう。子ども達を

注意深く観察すると、室内にもかかわらず、所狭しと走り回ったり、いろいろな遊びに夢中になっていたりというように、活発に動き回っている子供が多くみられるものである。また、中にはあまり動きの見られない子供も見られる。このような活動量の違いは、当然のこととして、前者と後者の間には、総運動量の間に大きな差が生じ、その結果として、運動能力にも大きな差が生じてしまう。

また、さまざまな運動遊びを行うことにより、運動経験は多様化される。その結果として、運動経験の横への広がりが増えられるにしても、運動経験を深化させていくことにはつながらないといえる。横の広がりとは、いいかえれば、「いろいろなことができる」ということであり、深化させていくことは、ある運動や運動遊びについて、「上手に」、あるいは、「なめらかに」できるということになる。そして、その経験を単なる経験にするのではなく、繰り返し行うことにより、深化を図ることが大切となる。

そうすることによって、現在及び将来の社会生活において十分に耐えられるような強健で、種々の運動能力を身につけた身体を育成し、身体の諸機能を高めることが可能になると思われる。また、運動やスポーツに親しむ態度までも身に付けることができるであろう。指導者や子ども達の親が体力面だけを強調するのではなく、運動やスポーツに内在する価値についてまでも十分に理解して、子ども達に遊びや運動、スポーツに取り組ませることが生涯に渡ってスポーツに接することのできる人間を育てていくことになるであろう。そうすることによって、子ども達に生涯スポーツを理解させ、実践させていくことが可能となるであろう。そして、さらには、生きる力を根底から支える体力の向上や健康の保持・増進が可能となってこよう。

4. 結 語

子ども達の体力の低下という問題は、15年以上も続いている。その原因としては、社会環境の変化に伴い、子ども達が遊ぶ姿があまり見られなくなったことや、高学歴社会の進行により、夜遅くに学習塾などから家路を急ぐ姿が多くみられるようになってきたことなどによる遊びや運動、スポーツなどの全身を用いた身体活動の減少が揚げられる。また、こ

のような子ども達の就寝時間は遅くなったり、就寝してからなかなか眠つけない子どもというような睡眠障害、体温の低下、朝から元気よく活動できないなど、子ども達の健康へさまざまな弊害をもたらしている。

幼児期という短期間に、子ども達は、形態的発育、機能的発達、知能・心・社会性など将来の社会生活に必要なものを身につけていくものである。その時期に、さまざまな遊びや運動をすることは将来の生活に耐える体力や健康をも身に付けていくことになる。さまざまな運動・遊びを行うことにより、運動経験は多様化され、運動経験の横への広がりが認められ、運動経験を深化させていくことは子ども達にとっては必要不可欠なことといえる。また、そうすることによって、現在及び将来の社会生活において十分に耐えうるような強健で、種々の運動能力を身につけた身体を育成し、身体の諸機能を高めることが可能になるであろう。さらに、生涯に渡って、スポーツを生活に取り込み、生涯スポーツを実践していく態度までも身に付けることが可能になるであろう。

これからの時代を担っていく子ども達に「生きる力」を育てるためには、まず、生きる力を根底から支えることになる体力を向上させ、健康を保持増進させていくことが必要となる。そのためには、幼児期から遊びや運動、スポーツに親しむ態度を育てていくことが大切となるであろう。また、高学歴社会に対応していくためにも、体力・健康に関する問題は重要な要因になりうるであろう。このように子ども達の体力や健康の必要性を指導者だけでなく、子ども達の親も再考し、子ども達の生活習慣や社会環境などを見つめ直す必要がある。

5. 参考・引用文献一覧

- 1) 中央教育審議会、子どもの体力向上のための総合的な方策について、2002. Pp. 62.
- 2) 深谷昌志、「『巣籠り』状況の中の子どもたち」、体育の科学、30-2: 91-95, 1980.
- 3) 深谷昌志、「遊びと教育との相克」、体育科教育、34-2: 9, 1986.
- 4) フレーベル、(岩崎次男訳)、幼児教育論、明治図書、1972. Pp. 241.
- 5) ガーヴェイ、C., (高橋たまき訳)、「ごっこ」

- の構造, サイエンス社, 1980. Pp. 218.
- 6) ホイジンガー, J., (高橋英雄訳), ホモ・ルーデンス 人類文化と遊び, 第11版, 中央公論社, 1970. Pp. 386.
 - 7) 家本芳郎, 「『遊び』の教育力」, 体育科教育, 34-2: 10-10-13, 1986.
 - 8) 飯塚邦明, 「学習塾と運動経験」, 体育の科学, 38-8: 587-591, 1988.
 - 9) 稲村博, 小川捷之 (編), 遊び, 現代の子どもを考える10, 第4版, 共立出版, 1985. Pp. 190.
 - 10) 磯貝芳郎, 「遊びの価値を見直そう」, 体育科教育, 30-1: 6-8, 1982.
 - 11) 経済企画庁 (編), 国民生活白書, 大蔵省印刷局, 1987. Pp. 111-122.
 - 12) 教師養成研究会 (編), 近代教育史, 学芸図書, 1980. Pp. 166.
 - 13) 加賀谷淳子, 「幼少年期の生活とスポーツ」, 体育の科学, 30-2: 548-553, 1980.
 - 14) 前川峯雄, 体育入門, 金子書房, 1952. Pp. 52-165.
 - 15) 松浦義行, 「子どもの生活と運動不足」, 体育の科学, 30-2: 96-100, 1980.
 - 16) 文部省, 小学校学習指導要領 総則編, 1999. Pp. 144.
 - 17) 日本子ども家庭総合研究所 (編), 日本子ども資料年鑑2003, KTC 中央出版, 2003. Pp. 396.
 - 18) 丹羽劭昭, 「なぜ, いま遊びの復権が必要か」, 体育科教育, 30-1: 2-5, 1982.
 - 19) 丹羽劭昭 (編), 遊戯と運動文化, 道和書院, 1979. Pp. 382.
 - 20) 岡本英明, 「競争心の発達と子どもの遊び」, 体育科教育, 30-1: 12-14, 1982.
 - 21) 小野繁, 「『遊び』の指導と教師の役割」, 体育科教育, 34-2: 25-27, 1986.
 - 22) 保健体育審議会, スポーツ振興基本計画のあり方, 2000. Pp. 25.